

死なないでいる理由

副住職の秋田光軌です。より若い世代のお檀家さまに、仏教や菩提寺に親しんでいただくきっかけを作りたいと、今年度から大蓮寺だより別冊「伝心」を発行することになりました。今後も内容を検討しながら、年4回の発行を予定しておりますので、ぜひご意見ご感想をお寄せいただければ幸いに存じます。

ところで、現代社会を生きる私たちにとって、「仕事」という営みは人生のなかでも重要な局面となっています。多くの職場では、文章や数値や図形で物事を目に見えるようにし、反省することで問題を見出し、その解決に向かうわけですが、ここで使用されている論理は「私は～できる」という成長志向です。今できないことも、努力すればいつか必ずできるようになる。私たちは仕事における成長を通じて、多かれ少なかれ職場の価値判断を自らのうちに浸透させ、時に大きな喜びを感じることもあれば、時には成長しない・できない他者を「無能」と格付けすることもあるでしょう。

一方、お寺という場は、職場と同じ位相にはありませんし、社会のその他の場所、あるいは安心して居られる我が家とも異なっています。お寺において見出される問題とは、「何故この私が生まれ、死んでいかねばならないのか」という、根源的な種類のもので。それは、私の努力によって解決できる問題ではありません。むしろ私たちには、「私は～できない」ということに「気づく」余地が、最後にかろうじて残されているだけです。自らの意志で生まれてくることもできなければ、自らの意志で死んでいくこともできない、それが私たち人間の有り様なのです。生命そのものから発されるこういった問いをめぐって、仏教のおしえによって探求し、気づくことが許されている場。それこそがお寺だと、私は思っています。

実は、葬儀や先祖供養を行うことが、お寺の目的ではありません。葬儀や先祖供養は「探求し、気づく道筋のひとつ」として非常に大事なのであって、あくまでもプロセスの渦中なのです。単に「お葬式をすること」だけが目的となっている施設は、お寺とは呼べないのではないのでしょうか。そして、もし職場や家庭でもその問いと向き合う機会がもたらされるのならば、職場や家庭もまた、その瞬間はお寺であるかもしれないのです。

これからも浄土宗のお念仏の教えを手がかりにして、より多くのお檀家さまと共に、「死なないでいる理由」に気づいてまいりたいと心より念じております。

南無阿彌陀仏。



—ご法事のたびに関東から飛行機で大蓮寺へ。日帰りの日程はきつくないのでしょうか。

浜口「父親はずっと営業畑の仕事をしていましたから、人が好きだったんでしょうね。仲人を60組以上務めたし、退職後も地元の池田市の地域活動に熱心にかかわっていました。晩年は家の事情で水戸に引っ越しましたが、人生の記憶はすべて関西にあって友人も多い。父のお知り合いですから、みなさんで高齢ですが、それでも法事には足を運んでくださる。ですから、以来法事は大蓮寺さんで勤めることにしています」

—浜口さんは父親の供養のため、つくばの自宅に仏壇を安置し、家族揃って開眼法要を勤めた。以来、彼岸やお盆には欠かさず塔婆回向を申し込まれる。

浜口「少子化になって、家の継承もむずかしくなっている。こういった伝統というものは、私のような世代がやらなくなるとますますわからなくなるんじゃないでしょうか。就職したばかりの息子がいるんですが、親のやることを見ておいてほしい。年をとることのプロセスを、ちゃんと見せておきたいという気持ちです」

—「終活」がブームの昨今、お寺と檀家さんの関係も変わっていくのでしょうか。

浜口「〈家〉という意識はとても大事だと思います。法事があれば一族が集まって、近況を知らせ合う。お墓が呼んでくれているようなものです。こういう時代、お墓詣りができること自体ありがたい。菩提寺やお墓は、私たちが〈家〉としてつながりを確認できる場所ですから、大切に

していきたいと思っています」
「十分なことはできていませんが、確かに菩提寺があるということは心強く思っています。伝統とか習わしは、しっかりしたルールがあることが大事だと思うんです。わからなかったり迷ったりしたら、元のルールに戻ればいい。大蓮寺さん、頼りにしています」

浜口さんは秋田住職と同世代。河川土木のコンサルタントとして、日本中の自然と向き合って仕事をされてきました。「家」「つながり」「ルール」など、規範意識を大切にしようとするお考えは、そんなお仕事の体験からにじみ出るものではないでしょうか。亡くなったお父様の友人関係をいつまでも大切にされるお姿から、最高の親孝行を感じました。



お墓が呼んでくれている

浜口憲一郎さん(茨城県つくば市在住) 61歳

浜口さんはお仕事の関係で、現在千葉県つくば市に在住。3年前、お父様を亡くされました。以来、首都圏と関西をつなぐ「お寺と檀家さん」のお付き合いをいただいています。三回忌法要のために来寺された浜口さんにお話を伺いました(文責/編集部)。



basic information

お盆のきほん！

～5つのポイント～

関西では8月13日～16日頃まで行われる伝統行事、お盆。年に1回、ご先祖さまの霊が帰ってくる時期とされており、「盆と正月の里帰り」と一般に言われるように、古来から日本人の心に深く根付いている風習・行事です。今回は、お盆のときに知っておきたい基本について、5つのイラストとともに紹介します。

3

はつぼん 初盆

故人が亡くなり、四十九日を超えてからはじめて迎えるお盆のこと。四十九日法要が終わらない間にお盆を迎える場合は、その翌年が初盆となります。大蓮寺では8月上旬頃に「新ぼとけ合同供養会」を行います。



4

はかまいり お墓詣

「迎え火」は、ご先祖さまの霊が帰ってくる時の目印のこと。「送り火」は、お盆の明けに、浄土へお見送りするときの火のことをいいます。どちらも家の前で「おがら」に火をつけて燃やしますが、住宅事情から困難な場合は、お墓で燃やしてもかまいません。



1

たなぎょう 棚経

お盆の時期に僧侶にお勤めをしてもらうことをいいます。ご先祖さまのみ魂をお迎えし、感謝報恩のまことを捧げる古来伝統の法儀です。盆棚・精霊棚にお花や食べものなどのお供えを用意することから、このように呼ばれています。大蓮寺では毎年8月6日～15日まで各家に伺い、お勤めをさせていただきます。



2

ぶつだん 仏壇

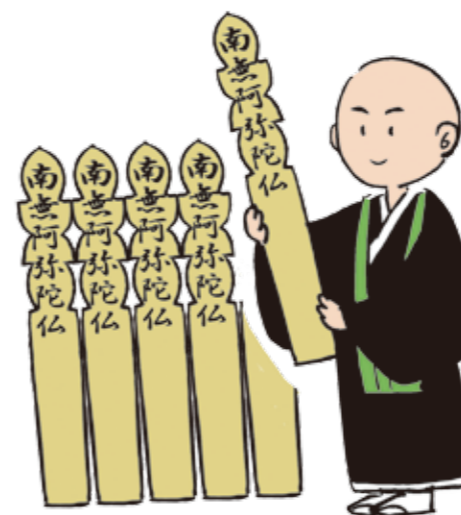
現在は一部地域をのぞいて、本格的な盆棚を用意することは一般的ではありませんので、仏壇の前に小机などを置いてお飾りを用意することが多いです。仏壇のなかは、ご本尊をはじめ、お位牌、過去帳、香炉、燭台などを定められた位置におまつりします。



5

うらぼんだいせがきえ 盂蘭盆大施餓鬼会

餓鬼道に落ちた亡者の供養としてはじまりましたが、今ではお盆の時期に併催されることが慣例になっており、ご先祖さまや無縁の諸精霊を供養する行事となっています。大蓮寺でも例年8月19日に行っており、1年のなかで最も規模の大きい行事となっています。



番外編

せんにちまいり 千日詣

8月9日・10日の両日は、1年の中で最も観音さまの功德のある日とされ、この日にお詣りすると、千日の間、続けてお詣りをしたのと同じ功德が授かる特別な日とされています。大蓮寺では、10日にお詣りの方に小豆粥の供養がごさいます。

じぞうぼん 地藏盆

地藏菩薩の縁日(厳密には毎月24日)が、お盆の時期である8月にかぎり、地藏盆と呼ばれるようになりました。今日では子どものための祭とも言え、集まった席で子どもたちに菓子などが振る舞われる場合も。パドマ幼稚園の地藏まつりは毎年大盛況です。